「ナイロンザイル（切断）事件」追求要点

本事件の焦点はナイロンザイルの悪質なる特殊実験による人命の軽視であり、一部の人々の金もうけの為に、大衆の生命が軽視された事に対する追求が私達の努力して来た要点であります。

終結声明

篠田氏は確実に証明出来る、わかりきったウソを苦しまぎれに言われるに及び、又追求してきた要点も確立されましたので、こゝに終結を声明します。

終結に際して

遭難防止は、山へ登るもののひとしく望む所であります。また私達の社会を少しでも幸福にしたいということも、私達の願いであります。しかしながら社会の出来事の中には、そのまま放置しておいたのではそれが前例となつてそれらに重大な悪影響をもたらすものがあります。こういうものに対しては、その事件を追求し、悪影響を及ぼさないような解決（以下これを正しい解決と呼びます）にまで持つて行くことが必要であると思います。

「ナイロンザイル事件」はまさにそういう性格の事件であると考え、私達は、この事件の直接関係者として、このような解決を求めて過去四年半努力してきたのであります。

その間、新聞・ラジオ・雑誌・学者グループの要望書、山岳団体の声明等でしばしば取り上げられ、それに井上靖氏の小説「氷壁」のモデルとなり、多くの人々に知られ、多方面から正しい解決のためあくまで努力を続けるようにとご激励をいただきました。

しかし今回、多数の学識経験者のご意見をいただき、その結果、左記の解決をもつて正しい解決に到達しえたと考え、これをもつてこの事件の追求に終止符を打つことにした次第であります。

社会の秩序と幸福を願う人々にとつては、こういう解決の方法ではご不満の点もおありかと存じますが、事情ご賢察いただきまして、なにとぞご寛容いただきますよう伏してお願い申し上げます。なお、これまでいろいろとご指導、ご鞭撻いただいた方々のご厚情に対し衷心から厚くお礼申し上げる次第であります。

一、事件発生の概要

まず、私達は誰のどの行為を問題にしているかという点を記します。それは昭和三十一年六月発行しました「ナイロンザイル事件」なる印刷物の冒頭宣言にかかげましたように、大阪大学教授であり、当時日本山岳会関西支部長であり、登山用具の権威者である篠田軍治氏が昭和三十年四月二十九日愛知県蒲郡市東京製綱株式会社内において、新聞記者、登山家多数の面前でザイルの性能に関する公開実験をなされましたが、そのときの篠田教授のご行為を私達は問題にしているのであります。

それは昭和三十年一月二日北アルプス前穂高岳で登山者が遭難死し、その死因について同行者の報告の真偽をめぐり同行者に重大な醜行容疑がかけられましたが、その死因鑑定の立場にある篠田教授は、公開実験前の予備

実験によつて、同行者の報告は正しくその容疑は無実であることを確認せられましたが、公開実験ではその容疑が事実であるとする特殊の実験を行なわれました。

また日本山岳会関西支部長という立場上、登山者の危険防止を十分考えられなくてはならないのに、公開実験前の実験によつてナイロンザイルに従来知られていない重大な欠点を熟知せられながら、その欠点が全くないことを示す実験のみを行なわれました。

二、篠田氏のかかるご行為が前例となつて、今後社会の秩序をみだす危険性について

私達は篠田氏のご行為は、例えば「乳幼児の死因は、ミルクに致死量の砒素が入つていたためだということを実験で確認した最高権威の教授が、ミルクには砒素が入つていなかつたと発表した」ということとまつたく同じことであると考えます。

篠田氏のご行為は遭難現場にいた同行者に死因についての無実の容疑をかけるという不当な人種侵害をなし、かつ一般登山者の生命を危険にさらした反面、ザイルメーカーは死因について当局並びに遺族の追求をのがれ

かつ、もともと良心的なメーカーであつたという信用を確保する点で莫大な利益を得たのであります。

従つて、もし、著明な学者である篠田氏のこのご行為がそのまま容認されるようならば、今後メーカーの過失にもとづく人命喪失が発生しました場合、メーカーは今回の事件をよい前例として学者に依頼し、事実をまげて自己の方を不当に有利にし、一方、無実の者に罪をなすりつけたり、大衆の生命を危険にさらすという人権の不当侵害があいつぐことが容易に想像され社会秩序がみだれると考えられるのであります。

更に大切なことはこの文明の発達した複雑な社会で、お互の生命が維持されていくのは、おたがいの生命を尊重し合い、とくに生命にかかわる品物を取り扱う人々は、危険防止のための万全の注意をすることが絶対に必要なのでありますが国民の指導者である著名大学教授のこのような行為は「危険防止のための万全の注意」の強調を空虚なものとすることはもとより誇大宣伝が他人の生命を無視してまで行われること（実質的に殺人と何らかわりありません）に足場を与えるなど、まことに影響は大きいと考えます。

三、篠田教授のご行為による将来への悪影響をのぞくには

この問題は、大衆の生命に直接かかわることであり、同時に社会に大きな影響力をもつ学者のあり方に関することであって、この問題を見解の相違とか、水掛論のままでおいておくことは絶対に出来ないと考えました。

今後の影響をのぞくには何としても篠田氏に「自分の行為は悪かった」と遺憾の意を表わしていただくか、少くとも「そういう行為は拙い」ということを客観的に確立しなければならないと考えました。

四、篠田氏はウソまで言つて従来の主張を変へる

そこで私達はその点、直接篠田氏にお願いすることはもとより、篠田氏のご行為を今後の影響上拙いと考えられた朝日新聞専務信夫韓一郎氏（三十二年六月）や大阪大学学生部長森河敏夫氏（三十三年八月）からも篠田氏にその点をお願いしていただきましたが、篠田氏は主張をまげられず、もはやこれを遂行するには篠田氏のご行為によつて少くとも相当期間死にまさる不当な迷惑をうけた私達から「遺憾の意を表していただく」という点で民事訴訟によつて争う以外に手段はないように思われ、事実その決心

をしたこともありましたが（時効は催告によつて現在なお続いています）現社会事情のもとでは、訴訟という方法は経済的にも困難の多い方法で長期にわたる為もあり、これによつて果して初期の目的が得られるかどうか確信は持ちにくいと、次第に考えるようになりました。

何か他に良い方法はないかと苦心しておりましたが今回、つぎの方法によれば「そういう行為は拙い」ということを客観的に確立するとともに、「篠田氏はそういう行為をなされた」という点も確立し得たと考えましたので、この方法を採ることにいたしました。同時にこれによつてこの事件に終止符を打とうと考えたわけであります。

それはどういう方法かと申しますと、これまでの経過の中にすでに見いだされるものであります。つまり昨年十月と十一月に篠田教授に公開質問をさしあげ、これが新聞・ラジオに大きくとりあげられましたが、この反論が篠田氏からなされ、これまた新聞・ラジオを通じて報ぜられましたがそれは、「ナイロンザイルに欠点があることは明らかである。四月二十九日の公開実験は、船舶、飛行機に関する実験であつて、ザイルとは無関係である」というものでありました。

つまり、篠田氏は、従来の主張を急に変えられたわけであります。従来篠田氏は、既述しましたように、私達の申し上げている事実を全部認め、

しかもそれは別に悪いことではないという主張でありましたが、今回はじめて「そういう事実はない」といわれたのであります。

何故、従来の主張を変えられたのでしようか。もし、そういうことが悪くないと真実考えていられるのならば、従来通り、「悪いとは思わない」といわれてもよいはずでありましたのに、その主張を急に変えられたのは「従来の主張では押しきれなくなつた。」つまり、「そういう行為は悪いことだ。」と気付かれ、そのために今回、「そういう事実はない。」というように主張を変更されたと考える以外にありません。

しかも、「あれは飛行機、船舶のロープの実験でザイルの実験ではない」というご発表はあとからも述べますように、万人のみとめがたいところでそういう明らかなうそをいつてまでも従来の見解を変えられたということは、篠田氏ご自身、「そういうことは非常に悪いことだ。」とはつきり認められたものと考えてよいと思います。

真実をまげ、他人の生命、名誉を不当におかしてまで、メーカーを有利にするという学者の行為は正しいものではないということが、実にこれだけの年月をへて、はじめて確立しえたということは感慨無量であるとともに、これはひとえに私達を応援して下さつた実に多くの人々のお力添えのたまものと喜びにたえないのであります。

私達は今後かりに誰かが篠田氏の行為が正しかつたということで、まきかえしてしまおうとしましても、（これは十分想像されることですが）以上の点でくいとめることは確かに出来ると信じ、これをもつて正しい解決をなしえたと考えるのであります。

実際、水掛論のままでは、「まきかえし」はくいとめられず、よいことか悪いことか分らなくされてしまい、今後ともメーカーと学者によつてこうしたことが、行なわれるに違いありません。それが、「こういうわかりきつたウソをいわねばならなくなつてしまつた。」という結果で終つたということであれば、よもや、「篠田氏の行為は良心的だつた。」という点にまでまきかえされるはずはないと考えるのであります。（中部日本新聞社内では、篠田氏のこの反論発表以来、誰一人として篠田氏を支持する人はいなくなつたということであります。（K記者の談））

五、篠田氏の明らかなウソの内容

著名学者がそういう行為をなされるということは、実際には重大だとは思いますが、然し私達はこの点は今としては追求しようとしまいとどちらでもよいという気がします。この問題は篠田氏個人、あるいはそれを追求

した私達との問題にすぎないのであつて、「そういうことが、善いことか」という前記の大衆の生命に直接かかわる善悪の判断の問題に比すれば、まるで僅少な問題であるからであります。

しかし、こゝまできた事件でありますから、この点についても少々述べさせていただきたいと存じます。

四月二十九日の公開実験は篠田氏によれば、「ザイルと無関係な船舶、飛行機の実験」であり私達によれば、「ザイルに関係のある実験なのであります。もとより、あの実験がザイルに関係あるものであつたということになれば、ザイルという生命にかゝわる品物の公開実験で、何故欠点を知りながら、しかも観衆はその欠点を知らないことを承知しつゝ、逆にその点をも長所とみせる実験を行つたかという質問に、篠田氏は答えられるはずはなく、篠田氏のご行為はまことに非良心的な行為だつたということになります。

一方あの実験がザイルに関係がないとすれば、私達はもとより朝日、毎日、中日、はじめ各新聞登山家がそのように感違いしていたことになります。それならば、あの実験は篠田氏のいわれるように、「ザイル」とは無関係の実験だつたのでしようか。あの実験では、「これは前穂高岳の遭難のときにつかつたザイルと同種のナイロンザイルです。」といわれており

ます。また、「この通りナイロンザイルを四十五度の岩角にかけておうむね人間の体重に等しい錘をおとした場合でも麻ザイルより強い。」ともいわれております。それにもつとはつきりしているのは篠田教授ご自身になる論文中に、東京製綱での実験は、ナイロンザイル切断原因究明のための実験の一部であると記されていることであり、また検察庁の調書でもその点は明らかに認められております。

要するに篠田氏のこの反論がウソであることは、篠田氏ご自身が一番よく知つていられることであり、篠田氏にそういう拙い行為があつたことは今となつては、周知の事実であります。

要するに、「その道に権威の大学教授が、ナイロンザイルが岩角で重大な欠点を持つことを、すでに承知しておりながら、かつ「岩角でも欠点がありませんね」と語りあつている登山家、報道関係者を目前に見ながら、その岩角で欠点をあらわさないという特殊の実験を黙つて続ける」という行為は、良心のカシヤクのためとうてい出来ない行為なのであります。もしくは、その行為は、もしその行為をすれば、今回のようにこのわかりきつたウソを、大学教授であり教育者である自身が発表せざるを得なくなるという、そういう恐ろしい行為なのであります。私達はこの点をはつきりと確立しえたと考えます。同時に、篠田氏も深く、反省していられるに

違いないと確信するのであります。

六、結び

私達はいうまでもなくいまとなつては、篠田氏個人に何等恨みも持つものではありません。

ただ、以上の点を明らかにすることは、とくに現在の社会事情としましては、今後の社会にどうしても必要なことであると考えているだけであります。

今回はこのような生ぬるい解決でもつて終結しますが、実際、もしもこういう事件が今後とも起きるようなことがありましたならば、そのときこそは必ずや、大衆の怒りとなつて爆発すると確信します。

国家公務員たるしかも最高の教育者たる学者が、特定の個人に対してばかりでなく、大衆の生命を危険にするなどということは、まさに人類の敵であるからであります。

もしも、このことが、先進国である西欧諸国で起きたとしましたならば、それは大変だろうと思います。

こういうことが正しいと考えられていられる学者に猛反省をお願いすると

ともに、今後二度とこのような不詳事が起きぬようメーカーも学者も十分自戒せられることを衷心からお願い申し上げます。

また、検察庁におかれましては、このような大衆の生命に大きな影響を及ぼす事件につきましては、多忙のため、調査が出来なかつたといわれたり、政治的な配慮をなされずに（すべての者に平等であらねばならない法が、無力な一般民衆に対しては、苛錯なく適用されますが、権力者（資本家を含む）に対しては政治的配慮なる「隠れみの」のもとに、全く適用されないのではないかということを私達はこの事件を通じて残念ながら確信させられたのであります。）適切な判断をなされるよう伏してお願い申し上げる次第であります。

考えてみますのに、百年以前までは、「斯り拾て御免」がいわゆる「おきて」として通用していた時代でありました。このような非民主的な制度も、これによつて利益をうける人々がある以上、すてゝおいてもそのまま自然に改善されてゆくということは決してありません。私達の社会を幸福にするには、やはり正義と真実を求めてお互にたえず努力することが絶対に必要だと考えるのであります。現在の社会は昔にくらべればおおくの人々の苦しい努力によつてたしかに改善されています。しかし、まだまだこのような恐ろしいことが起きる世の中であります。

私達の苦しい出費と青春をかけたエネルギーが、社会の向上に少しでも役立つものならば、それは私達にとつてただただ無上の喜びとするところであります。（本声明文は一部省略し、又附記も省略しました。）